

Title	レスールザーデとイラン立憲革命
Sub Title	M. E. Resulzade and the Iranian constitutional revolution
Author	石原, 賢一 (Ishihara, Kenichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2006
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.74, No.3 (2006. 1) ,p.103(319)- 133(349)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20060100-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

レスールザーデとイラン立憲革命

石原賢一

はじめに

青年トルコ人革命が比較的短期間で終了したのに対して、イラン立憲革命（一九〇五—一九一一）は約六年にも及び、革命の参加者もウラマー、知識人、商人、部族、非ムスリム、女性といったように多様であり、イランの利権にかかわるイギリスとロシアの動向もこの革命に影響を与えたことや、立憲運動に対してザカフカースから支援があったことから窺われるようにその革命の様相は複雑である。また、青年トルコ人革命がイスタンブルとその周辺における局地的な革命であったのに対して、イラン立憲革命はテヘランだけにとどまらず、タブリーズ、ラシュト、イスファハーンといった諸地方にも革命運動が波及し、全国的な広がりをもっていた。

イラン立憲革命はそれへの参加者、地域的な広がりのみならず、時期的にも第一次立憲期、それに続く小専制期、第二次立憲期の三つの期間にわたって錯雑としたかたちをとって革命が進行していった。このように複雑な経過をたどった革命を全体としてとらえていくには多くの困難がともなうが、バクー出身のジャーナリスト、メフメット・エミン・レスールザーデという人物は地域的にも時間的にも錯綜したかたちで進んだイラン立憲革命の動きを俯瞰的に考察する上できわめて魅力的な人物だと思われる。

彼は第一次立憲期と小専制期の途中までバクーでペルシア語の新聞を購読し、イラン情勢の把握、紹介に努めるとともに、その後、イランに赴き、小専制期と第二次立憲期のイラン情勢を現地で観察し、イランの政治にも

かわるといふように、立憲革命をある時には外国から観察し、またある時には現地で主体的にかかわるといふ体験をした貴重な人物である。また、彼はジャーナリストという性格上、イラン各地に赴き、そこでの立憲運動の様子をつぶさに観察し、記事に書いている。その軌跡を地域、時間の両面からおさえていくことによつてイラン立憲革命のマクロの様相のみならずミクロの様相がみえてくるという点でレスールザーデの書いたものは史料的にきわめて有用である。

これまでイラン立憲革命史研究はもっぱらペルシア語史料を用いて行われてきたが、本稿ではレスールザーデがバクーのアゼルバイジャン語紙に執筆した論説・記事⁽¹⁾を基本資料に用いて立憲革命を考察することにした。また、バクーでの活動を伝えるレスールザーデのトルコ語の著作を補助的に用いることによつて、バクーとイランの事象を比較検討し、イランとザカフカースとの連関関係やロシアと立憲革命の関係を考察していくことしたい。

テヘランに移ったレスールザーデは第二次立憲期のイランでデモクラート党の機関紙『新イラン』(Tran-e Now)の編集者を務め、一九一〇年、同党のライバル政

党を批判した小冊子『エテダーリユーン党批判』を執筆している。この小冊子の内容についてはすでに Janet Afary の優れた研究がある⁽²⁾。以下においてはレスールザーデがこの小冊子を執筆するまでの時期、すなわち第一次立憲制の成立の前夜から第二次立憲制の成立(一九〇九年夏)までの時期にしばつて考察することにした。

一 ザカフカースの社会主義組織とイラン

バクーのムスリムの間最初に組織された社会主義組織は一九〇四年にレスールザーデらバクーのムスリム知識人によつて創設されたヒュンメト(精励)という組織であるとされている。このヒュンメトという名称は、この組織が発行していた雑誌『ヒュンメト』⁽³⁾から借用されたものであり、この語はもともとはアラビア語の格言に由来するといわれる「手をひとつに合わせれば、山を動かすことができる」(El bir olsa, dag oynadar yerinden)という言葉に倣つて採用されたという。この名称に関して、アゼルバイジャン人研究者スレイマノヴァは、当時カフカースでは委員会(Komite)と聞くと、ムスリムたちはアルメニア人政党ダシナクツチュン(以下、ダシ

ナクと略す)を連想してしまつたため、誤解、混同を招かぬよう新たにつくられた組織の名前に委員会の語を入れるのを避け、たんにヒュンメトを名乗つたという。最初は便宜的、慣用的に使われたにすぎず名称の変更も考えられていたが、いつしか人々の間にこの呼び名が根付いてしまつたためにこの名称が継続することになつたとい⁽⁴⁾う。

ところで、ヒュンメトには一九〇五年にナリマン・ナリマノフが加入するといふようにロシア社会民主労働党のメンバーも加入していた。したがつて、同党の多大な影響を受けていたことが想像されるが、ロシア社会民主労働党とヒュンメトの関係をどのように考えたらよいだろうか。この点に関して、スレイマノヴァは第二回ロシア社会民主労働党大会で採択された綱領をナリマノフがアゼルバイジャン語に翻訳したものが配布されたことをあげ、ヒュンメトが独自の綱領と規約をもたなかつたとして⁽⁵⁾いる。また、第四回ロシア社会民主労働党大会にロシア社会民主労働党バクー支部とヒュンメトの代表として出席したユスイフザーデはこの大会で「ヒュンメトはロシア社会民主労働党バクー支部の一ファクションである。我々の組織はバクー支部の一部として、それに内包

されており、カフカースのムスリムの間で活動を行つてゐる」といふ発言を行つたとい⁽⁶⁾う。以上から、ヒュンメトがロシア社会民主労働党バクー支部の一ファクションと考えられそうだが、話はそう単純ではない。それは、ロシア社会民主労働党の内部においてポリシエヴィキとメンシエヴィキとの間に決定的な溝があり、同党のバクー支部もこの例外ではなかつたからである⁽⁷⁾。この影響を如実に現しているのが、一九〇五年頃に設立されたチフリス・ヒュンメトの存在である。チフリス・ヒュンメトはグルジア・メンシエヴィキの影響をうけるとともに、バクー・ヒュンメトとは異なり、独自の綱領と規約を有して⁽⁸⁾いた。

また、社会主義者革命党(エスエル党)の綱領を採択したというムスリム・イツティファーク(Muselman Ittfaq)の存在も無視できない。スレイマノヴァによると、この組織は一九〇六年に結成され、元々ヒュンメトの戦闘員であつた者たちで、思想の違いからヒュンメトから離反した者たちがエスエル党を宣言したといふ記述がアルヒーフ資料にみられるとい⁽⁹⁾う。また、ポリシエヴィキのメンバーであつたエフエンデイイェフの回想録の中にもこのことを裏付ける記述がみられ、この組織はダ

シナク党の路線に近いものがあつたという。具体的には、ゴチュと呼ばれるごろつきたちを用いて、その活動において武力行使も辞さなかつた。この過激な路線のために支持者を失い、一九〇七年には消滅したといふ。⁽¹⁰⁾

以上から分かるように、ヒュンメトの内部ではポリシエヴィキ系やメンシエヴィキ系、さらにはエスエル系の者たちが入り乱れており、決して一枚岩の組織ではなかつた。したがつて、それ自体が分裂しているロシア社会民主労働党バクー支部からヒュンメトが一元的に支配を受けていたとは考えにくく、ヒュンメトが同党の一ファクションと断定を下すことは差しひかえなければならぬ。

このヒュンメトに影響されてバクーの石油産業で働くイラン人労働者の間に社会主義思想が浸透し、その兄弟党としてイラン社会民主党が創設された。その創設者の一人としてナリマン・ナリマノフもその名前を連ねているが、彼以上にザカフカースとイランとの間に社会主義思想、運動の橋渡しをするのに重要な役割を果たしたのは、ヘイダル・ハーンであつた。彼はイランからザカフカースに移住した家系の生まれで、テヘランにイラン社会民主党の支部を創設し、ロシア社会民主労働党やヒュ

ンメトそしてバクーのイラン社会民主党本部と連絡をとつていた。⁽¹¹⁾ また、ザカフカースの諸都市（バクー、エレヴァン、チフリス等）のイラン人出稼ぎ労働者の間でモジャーヘドという組織もつくられたが、これとイラン社会民主党は同一の組織であつたようである。⁽¹²⁾

このようにイラン人の出稼ぎ労働者に決定的な影響を与えた社会主義系の組織はバクーに本部を置き、テヘランに支部が開設されたイラン社会民主党であつたといえるが、その綱領は兄弟党たるヒュンメトと共通していた。上述したように、ヒュンメトの綱領としてはナリマン・ナリマノフがロシア社会民主労働党の綱領をロシア語からアゼルバイジャン語に翻訳したものに一部修正・削除が加えられたものが採択されている。それにさらなる修正・削除がイラン社会民主党によつて加えられ、それが一九〇七年九月にマシユハドで行われた第一回イラン社会民主党大会で綱領として採択された。⁽¹³⁾ つまり、ヒュンメトもイラン社会民主党のいずれも綱領は基本的にはロシア社会民主労働党から借用していたのである。

以上から明らかのように、バクーの石油産業で働くイラン人出稼ぎ労働者の間に相次いで設立された二つの政党を通じて社会主義が浸透していった。こうしたなか彼

らがバクーからイランへと短期間の出稼ぎを終え、戻ることによってイランの地域社会に社会主義が強く影響するという状況が生まれた。この間の事情をレスールザーデは次のように記している。

北イランからカフカースにたくさんの労働者がやって来ていた。バクーだけでも多数の労働者がおり、六万人近くのイラン人がいた。ロシアにいたイラン人商人やイラン人労働者がロシア革命の影響を受けなかったということはできない。イラン人はその本部がカフカースにある革命組織「イラン社会民主黨」筆者による追補、以下同様」を創設し活動を開始した。カフカースやロシアの他の諸地方で労働に従事していたイラン人は母国に戻るときに、横暴な国境管理官が盗み取ることができないような果実を持ち帰ってきた。つまり、革命と自由の思想である。¹⁴

このレスールザーデの記述から明らかのように、イラン社会民主党はイラン北部に影響力を拡げ、立憲革命時にはタブリーズやラシュトにおける武装蜂起で重要な役割を果たした。このザカフカースの社会主義組織とイラ

ン立憲革命の連関関係については第三章で触れることにし、まずはレスールザーデがイランに来る以前、バクーにおいてヒュンメトに属するジャーナリストとして第一次ロシア革命に参画していた時期に勃発したイランの立憲革命を彼自身がどう見ていたのか、彼の書いたいくつかの論調を手がかりに整理しておくことにしよう。

二 バクーからの観察

——レスールザーデの立憲制認識——

(1) 第一次立憲制成立以前

一九〇六年一月、モザツファロツディーン・シャーが公正の家(アダーラト・ハーネ)の開設を認める勅令を發布したことで、前年の末から発生していた暴動の一応の沈静がみられた。しかし、この勅令の約束が果たされない¹⁵とみると同年夏、再び暴動が発生し、ついに八月、憲法勅令がシャーによって発布され、国民議会の開設と憲法の制定が認められた。ここでは第一次立憲制が成立するまでの期間におけるレスールザーデのイラン情勢に関する見解をみていくことにする。

レスールザーデは公正の家の開設を認める勅令が発布

された直後の二月、ペルシア語の小冊子に掲載されたこの勅令の翻訳と自分の見解を加えた論説を書いている。その中で次のように述べている。

それを手に入れるためにヨーロッパ諸国の誰もが苦
勞し、血を流し、家族が離散し、数百年数千年も努
力を続けた後に獲得した自由をイラン国民はささや
かな行動で獲得することに成功した。まさにその歴
史のページを己の才能と文明で飾ったイランでは不
穩な者、怠惰な者、独裁者、無学な学者たちで溢れ
ており、今日の我々の心に希望の光をもたらしたイ
ランの自由に関する電報の知らせを誰も信じようと
はしなかった。多くの人々は、この国は死んでしま
つて、もはや再生しないと⁽¹⁵⁾いつていた。

これからイランではヨーロッパ諸国とは異なり、多数
の犠牲者を出さずに自由を獲得したことを彼が称えてい
ること、ザカフカースではイランはもはや死んだ国と同
然に考えられていたことが読みとれる。また、彼は公正
の家の開設を自由の獲得と同一視していた。しかし、彼
のイラン情勢に関する見解は決して楽観的なものではな

かった。公正の家について次のように述べている。

イランで与えられた（もし表現するならば）国民議
會 (Mecis-i mebusan) はロシアの自由のようにな
るだろうか？この問いに対して、確実にノーと我々
はいうことができる。なぜならば、イラン国家は己
の現状を維持していくことが不可能であることを認
識しており、自由の基礎に基づいて再生されること
が必要であると分かっていたから⁽¹⁶⁾だ。

当時あいまいな概念であった公正の家を国民議會と表
現し、彼の公正の家に関する理解が混乱していたことが
窺われる。先に公正の家の開設を自由の獲得であると述
べた彼であるが、それでは不十分であると認識していた。
彼がいう「現状」とはシャーによる独裁専制体制のこと
であり、「自由の基礎に基づいて再生される」とはこの
体制の変革・崩壊を意味している。つまり、公正の家の
開設程度の中途半端な処置ではイランの自由は真に達成
されないものであり、抜本的な変革こそが必要であると彼
は認識していたのである。

六月に再び暴動が発生したことをうけて、同月に書か

れた論説では前の論説と同じくザカフカースの人々が抱いているイランの悪いイメージを並べ立てた後、それを否定する説明を加えている。

たくさんの厳しい条件で負債を抱え、国の内政ではなく、また学校や道路ではなく、外国、ヨーロッパ、パリにおけるやはり外交にでもなく、他人の苦勞のおかげで寢食し、放蕩にふけている王族たちとともにヨーロッパの美女にお金を費やしているのを見たら、またこれに反対した民衆による空虚な抗議が不運な結果に終わったことを見たら、誰も「イランはいたずらに混乱しているのだ」とか「近代ヨーロッパ的概念での」法を⁽¹⁷⁾理解していない」とはいえないのではないか？！

彼によれば、イランが近代化から取り残された瀕死の国家となつてゐるのは、シャーが国費を国内整備や外交に投入せず、いたずらにヨーロッパ旅行に浪費しているからなのであつた。また、民衆は決してこの失政の傍觀者なのではなく、不十分ではあるにせよ行動を起こしたことを例に挙げてイラン国民は自ら国家を建て直す意志

があることを述べて援護している。これに続いて、彼はロシア革命とイランで進行中の革命との関係を次のように説明している。

今日まで、即ちロシア革命の激動の時代まで人々はイランについて悪いイメージを抱いていたが、それは当然のことであつた。しかし、ロシア革命の全世界を揺り動かした経済的かつ政治的衝撃に圧倒されてイラン人も目覚め始めた。(中略) 各国、各地域の歴史をみれば、運動はそれに連鎖する運動という形で出現してきた。多少遅れがあつたとしても、それはまさにその土地や経済・社会状況のためである。さもなければ、革命は総じて至るところで同じ性質のものとなる。フランスでみられた出来事は今日、ロシアで見られ始めた。ロシアで発生した出来事はイランにも波及している。⁽¹⁸⁾

革命は連鎖するものであると述べる彼は、イランで進行中の革命はロシア革命の多大な影響を受けていることを強調している。興味深いことに、この時期、彼は社会主義系組織ヒュンメトに属していたにもかかわらず、口

シア、特に工業都市バクーとイランにおけるプロレタリア階級の歴然たる差異に配慮せず、革命が発生する時間の差異には言及するものの、革命の性質は同じであると説いている。これは彼がマルクス主義の純粋な信奉者だったわけではなく、バクーのムスリムの組織化をはかるために、当時ロシア領内で隆盛していた社会主義思想という殻⁽¹⁹⁾だけをかりていた可能性を示唆しているといえるだろう。

(2) 第一次立憲期

一九〇六年八月月上旬、シャーが憲法勅令を發布した直後に論説が書かれている。そこでは、ロシアの十月宣言とは異なり、イランではシャーではなく国民が憲法を制定することを根拠⁽²⁰⁾にして、イラン情勢がロシアに比べて樂觀できると述べると同時に、注意を呼びかけることも忘れていない。

イランの今日の日々はロシアのまさにその記憶から抜け去っていない一〇月の日々に似ている。しかし、アッラーのご加護により一〇月の日々の後に発生した大きな悲劇はイランでは起きないだろう。とはい

つても、政府の人々を信頼することはできない。(中略) シャー閣下の周りに集まるサタンたち——つまり大臣たちがことをふしだらにし、だめにしないように常時見張っていないなければならない。最終的な公共の利益を自分個人の利益の犠牲にすることをこの大臣たちはすっかり常としてしまっているようだ。百年も彼らの心に根付いてしまったこの習慣は二、三日で消滅することはありえない。(中略) イラン臣民は自分の知事の状況を推し量り、略奪者が国民の法を奪い、自由⁽²¹⁾に打撃を与え、アミール・バハードル・ジャング⁽²¹⁾たちが決して再び登場しないように常時監視していなければならない。官僚といわれるこの大臣や知事が民衆の最大の敵なのである。彼らを監視し、決して機会を与えてはならない。⁽²²⁾

この記述から明らかのように、シャーに対しては批判や懸念を述べることはせず、イランにおける立憲制の敵とは、「サタン」とまで言い表している大臣や知事ら腐敗した官僚であると彼は認識していた。これは立憲制が中断させられることがあれば、それは浪費癖と意志薄弱で知られるモザッファロッディーン・シャーが己の意思

で行うのではなく、シャアの取り巻きの官僚による入れ知恵によって発生すると彼が想定していたことを表している。これに続いて、国民議会にも言及する彼は望みどおりの憲法が制定されるには国民議会選挙で「自由主義者たち (hurriyyatparastar)」が「専制君主派 (istihdadxah)」に勝利しなければならぬとし、その対策についても述べている。

国民は成熟しておらず、国民の敵もまれではないので、この件について手段を講じなければならぬ。もしジャーナリズム (madrak) が政府高官たちの監視下にあり、表現の自由がなければ、貴族や大臣は好き勝手なことをしてしまう。したがって、選挙のルールを知らせ、政府高官の不正を偵察するため、ジャーナリズムは自由で、いかなる侵害からも守られなければならない。そうであれば、ジャーナリズムが伝えたことを弁士が民衆に口頭で伝え、彼らにことを通じさせることができる。しかし、これだけでは情報は広まらない。なぜなら、人が発言し、演説を行いたいのであれば、家で座って石の壁に向かって話してはだめであり、結社 (icima) や

協議会 (sura) や集会 (miting) で行うことになるからだ。それゆえ、こういったことに配慮して、結社、協議会、集会の自由も認められなければならない⁽²³⁾。

彼自身がジャーナリストであることから単に自分の職業の重要性を強調しているだけとはとれない。この説明は理論整然としており、説得力がある。彼にとってその自由が認められなければならないものは二つあった。ひとつは選挙での不正を監視し、民衆に正しい情報を伝えるために必要な出版・表現 (ジャーナリズム) の自由である。もうひとつは、ジャーナリズムがもたらす情報に接することができる一部の知識人がその多数が文盲である一般民衆に演説をおこなうために必要な集会・結社の自由である。この二つの自由は第一次ロシア革命後のザカフカースでも認められたものであり、彼自身も享受し、イランでも必要であると考えていた。彼の提言はこれだけにとどまらず、イランで重要な役割を果たしつつあるアンジヨマン (集会・結社) を意識した発言も行っている。

連合 (itifaq) が一体となるためには方式や基盤がそれぞれ異なる結社を創設して話をして、ことは成就しない。ことを成就させるためには、物質的かつ精神的な資本が必要である。このためにも各同業者組合と各同業者は連合して、自身に固有の資金を設け、必要な場合に支出されなければならない。

(中略) 各同業者組合と各階層はこのような連合を組織した後、この連合は互いに関係を有し、「複数の連合が集まったさらなる連合」を形成する。この方法で全民衆の力はひとつになり、組織立てられた大きな力が得られる。そしてこの方法で国民は敵の策略と畏に對抗し、敗北することや騙されることはない。⁽²⁴⁾

彼は itifaq (連合) という語をロシア語の「連邦・連合」さらには、転じて「組合・結社」を意味する *soobco* と同義に扱っている。itifaq という語はアンジヨマンと置き換えてもよいだろう。彼のいう「物質的かつ精神的な資本」とは何を指すのだろうか。物質的な資本とはいうまでもなく、各アンジヨマンがいつでも必要なときに支出することが可能な資金を指すことは明らかである。

それに対して、精神的な資本とは、アンジヨマンがおの独立して活動するのではなく、各アンジヨマンが団結・統合して大アンジヨマンを創ることで生じる「大きな力」から得られる精神的な支柱のことを指していると思われる。

レスールザーデのこの主張には当然のことながら、当時のバクーの状況が大きく影響していた。一九〇六年三月、労働組合の設立が合法化され、バクーでは次々と労働組合が設立されたが、この件に関して、メンシエヴィキとボリシエヴィキの間で見解の相違があった。前者は熟練労働者からなる組合を志向していたのに対して、後者は未熟練労働者からなる組合を志向していた。また、ボリシエヴィキは石油産業において民族や職種別の組合ではなく、同一の組合とすることを主張していた。⁽²⁵⁾ つまり、掘削業や運搬業といったように石油産業内の職種ごとに組合を結成するのではなく、石油産業全体を包含する統一的な労働組合を志向していたのである。

ボリシエヴィキのこの試みは同年の夏に結実し、バクーに石油産業労働者組合が設立された。そして、レスールザーデはこの組合の運営委員会の委員に選出されている。⁽²⁶⁾ 以上のことを踏まえると、レスールザーデのアンジ

ヨマンに対する提言はバクーで自らが行っている労働組合活動を応用したものに他ならないことがわかる。

三 ラシユトでの観察

(一) レスールザーデのイラン到着の時期と意味

これまでレスールザーデのイラン来訪については、一九〇八年であるとか一九〇九年であるといわれてきたが、いずれも正確ではない。一九〇九年にイランにやって来る以前にレスールザーデは一九〇八年の夏、既にイランに来訪している。これはタブリーズ蜂起の状況を視察するために同地に赴いたもので、行動範囲もタブリーズとその周辺にとどまり、短期間の滞在であったと思われる⁽²⁷⁾。それに対して、一九〇九年の二度目のイラン来訪では、一九一一年にイランから追放されるまで滞在し、行動範囲もラシユト、タブリーズ、オルミューイェ、ジョルフア、テヘランといったように広く各地にわたっており、最初の来訪とは性格を異にしている。ここでは、二度目の来訪について、その時期と意味について考察したい。

再びイランに来訪したレスールザーデが現地から書き送った最初の記事は三月一八日付の『進歩』紙に掲載さ

れたラシユトからのものである。アスタラやタブリーズといったイラン・アゼルバイジャンからではなく、ラシユトから第一報が届けられていることは、彼がバクーから陸路を伝ってイランに入国したのではなく、海路でアンザリーに上陸し、そこから陸路でラシユトに到着したことを示している。また、彼のイラン来訪の目的は、ラシユトで二月七日に勃発した蜂起の進展を視察することだった。第一報の掲載日から判断して、彼がラシユトに到着したのは三月の中旬か中旬だったと思われる。

次に考えねばならないのは、彼が政治的使命を帯びてラシユトにやって来たのか否かということである。その根拠については、また後で触れることにするが、彼はあくまでも『進歩』紙の特派員としてイランに派遣されたのであり、政治活動に従事するためにイランにやって来たのではないと考えるのが妥当である。実際、彼はイランで出会った人に自己紹介するさいに、ロシアの新聞社の代表であるとしか名乗っていない⁽²⁸⁾。また、ラシユトのモジャーヘディーンによるテヘラン征服に彼が立ち会ったかどうかについては、戦闘には従事しなかったものの、その場に居合わせたと考えてよいだろう。モジャーヘディーンと行動をともしたか、あるいは単独で取材に動

き回っていたか、どちらかは判別できないが、記事の中でテヘラン征服の過程が詳細に描写されていること、その記事が掲載された日付が一九〇九年七月一九、二〇日であることから逆算して、イランから記事が電報で送られたのはこの一、二日前である可能性があり、テヘランの征服が完了した七月一六日には彼がテヘランに到着し取材していたと考えると考えてよいだろう。

(2) ロシアの脅威

ラシユトで二月七日に立憲派によるクーデターが成功したといっても、その後の革命運動が必ずしも順調に進んだわけではなかった。イラン北部に権益を有するロシアは黙って手をこまねいてはいなかった。クーデターから約一カ月後、ロシア・コサツク部隊がアンザリーに上陸し、ラシユト市内に入ってくるという事件が発生した。⁽³⁰⁾ 四〇人のコサツク兵と機関銃二機から構成されるこの部隊はその規模こそたいしたことはないものの、市内を傍若無人に歩き回って威嚇的な行動をとり、住民を震え上がらせた。これに対して革命の側は迅速に対応した。すなわち、ギーラーン州アンジョマンは、コサツク部隊がアンザリーに上陸すると、すぐにラシユトの外国諸領事

館（ロシア、イギリス、オスマン朝、ドイツ、オーストリア）にこの件について抗議する質問状を送付した。その内容は次のようなものであった。

最近ご存知のように、ロシアからコサツク部隊がギーラーンに進入いたしました。しかしながら、二月七日から今日まで（我々の方から）誰一人としてロシア臣民に対して法のはずれた侵害行為をした覚えなどありません。各国の制度と法に逸脱するロシアのこの行動は民衆を激昂させ、大変な憂慮、心痛を引き起こしております。このようなとんでもない苦難をもたらす進軍と行動を取り止め、イラン国民を苦しみから救ってくださることを我々は要望する次第です。⁽³²⁾

この質問状に対する回答として、レスールザーデはロシア、イギリス、オスマン朝、ドイツの各国領事館から寄せられたものを紹介している。オスマン朝とドイツからの回答は常日頃、治安維持に努めている革命政府に謝辞を述べるだけの単に儀礼的な内容にすぎなかった。⁽³³⁾ これに対して、イギリスとロシアからのものは少し異なっ

ていた。ロシアからの回答は、コサック部隊の派遣はもっぱらロシア皇帝の命令によるものだという誠意に欠けた説明に終始し、さらに次のような抗議が付けくわえられていた。それは、ロシア領事館員バスイーリー・ハーガニーがテヘランへ赴く途中、襲撃に遭ったことに対する非難である。この原因をロシアは革命政府が幹線道路の治安維持を怠っていることにあるとした。さらにロシアの電信局と領事館に職員が入る際にイラン側によつてチェックを受けることに不満の意を表し、改善されない場合はコサック兵の増員を行う可能性があると脅した。また、イギリスの抗議は、立憲派によるラシユト征服のさなかに生じた混乱で同国の領事館員が二名殺害されたことに対して、一二五トマーンの賠償金を要求するものであつた。⁽³⁴⁾

しかし、レスールザーデはこれら領事館からの回答をたんに紹介するだけではなく、自分の見解を加えその不当性を述べる。彼によると、ロシアとイギリスが互いに領事館員だと述べる人物はいずれもイラン臣民であり、両領事館と関係があるといつても、領事館の使用人ないしは領事館員の雇員にすぎず、非難にあたらないう。ロシアの電信局、領事館への出入りのチェックの件も事

実無根だとしてそれを却けている。

ロシアの回答は体裁の上ではいまだ臨時政府（ギーラーン州アンジョマン）を正式に認めていないなかでおこなわれた。⁽³⁵⁾ それゆえ、基本的にロシアはラシユトに成立した臨時政府を好意的にはみておらず、少しでもロシアの利益が損なわれるならば、いつでもイランの革命に干渉する準備を整えていた。

このような混沌とした状況の中、コサック部隊がラシユトにやつて来た真の理由についてその核心に迫る情報がレスールザーデのもとに漏れてきた。それは、そこにあるロシア領事館襲撃をロシアが自作自演し、それを口実にコサック部隊が出動し、ラシユトの臨時政府を転覆させるといったものだった。この情報は、レスールザーデが伝えるところによると、ロシア領事館員の一人が親しい人物に語り、そこから伝え聞いたということだから、かなり信憑性の高いものであつた。⁽³⁶⁾ また、このコサック部隊の兵士たちがトルコ語とロシア語、二つの言葉を話すという事実は、彼らが特別の任務を帯びてイランに派遣されてきた可能性を示すものであつた。⁽³⁷⁾

以上から明らかなように、ロシアはラシユトにおける革命運動の進展を懸念し、早くからコサック部隊を送り

込んで革命運動を牽制しようとしていた。また他方で、ロシアはイギリスとともにシャーを説得して五月に立憲制の回復を約束する勅令を發布させようと圧力をかけていた。³⁸先にみた、革命運動の進展を牽制するコサック部隊のラシユトへの派遣というロシアの行動と、立憲制の復活を促すこの行動は一見、互いに矛盾しているように見えるが、それは次のようなロシアの深謀遠慮に発していた。

シャーが英露両国の説得を受け入れて立憲制回復を約束した裏には、第一次立憲期に議会に否決されて、外国と借款の契約を結ばなかったという事情があった。財政赤字で首が回らない逼迫した状況の中、シャーは英露両国がカージヤール朝に対する借款を保障するという条件で立憲制回復に渋々と同意した。こうすることを通じて英露両国は、立憲派の人々にも恩義を与え、イランの北部と南部にそれぞれ有する權益を保持することを狙ったものと思われる。

他方、ロシアにとってコサック部隊をラシユトに派遣するという行為は、立憲派の臨時政府によるギーラーン制圧が進むなかで自国の權益が損なわれる事態を極力、防止するための牽制的処置という意味合いがこめられて

いた。実際、派遣されたコサック部隊は少数であり、直接、革命運動を中断させるだけの力はなかった。また、ロシア領事館員の一人が伝える情報から窺えるように、革命運動が急進的に進展し、ロシアの權益が損なわれる事態が出てくれば、コサック部隊は即座に特別の任務を果たす手はずになっていた。つまり、コサック部隊は、急進的な革命運動を牽制するという使命と、時と場合に応じてクーデターを起こすための先遣隊という二つの使命を帯びてラシユトに派遣されていたと思われる。また、派遣されてきたコサック部隊の兵士たちがロシア語だけでなく、トルコ語も話せたということは、ロシア領事館襲撃をイラン・アゼルバイジャン人による仕業だと偽装する意図も隠されていたとも考えられる。

(3) ギーラーンとザカフカースの連関関係

ラシユトとザカフカースの連関関係については様々な研究者によって指摘されてきたが、それらは概して、蜂起活動そのものについてザカフカースからの支援があったことが言及されてはいるものの、ラシユト征服後の革命運動とのかかわりについては、①ラシユトの人材不足を補うために、ザカフカースからブルガリア人社会主義

者パノフが派遣されたこと⁽³⁹⁾、②秘密裏にポリシェヴィキのメンバーであるオルジョニキツゼが到来し、テヘラン征服にも立ち会ったこと⁽⁴⁰⁾、③テヘランの征服にザカフカースの支援部隊が貢献したこと⁽⁴¹⁾以外はほとんど言及されていない。ここでは、レスールザーデの記事をもとにラシウトとザカフカースの連関関係の一端を明らかにしたい。

サツタール委員会の主導でクーデターが起こされ、ラシウトに臨時革命政府が樹立されたが、政治活動の経験に乏しいこの政府がザカフカースの社会主義者たちに政策の助言を求めるのは当然のことであった。財政政策にもこの様子が窺われる。たとえば、ラシウト市内の劇場でコンサートが催され、この収益は困っている人びとのための救済基金に充てられた⁽⁴²⁾。また、戦闘で亡くなったグルジア人の家族に支払う見舞金を集めるために、劇場でトルコ語とロシア語による演劇が上演された。ちなみに、トルコ語の舞台はアゼルバイジャンの有名な劇作家スルタン・メジト・ガニザーデ（一八六六—一九三七）の作品であった⁽⁴³⁾。これらの行為とザカフカースの社会主義者との関係をどう説明したらよいだろうか。これについてはバクーにいた頃のレスールザーデの次のような活

動が参考になる。

ある日、ポリシェヴィキの財政委員会のメンバーが数人、私のところにやって来て申し入れをした。「一緒に園遊会を催そう。あなた方の主催という体裁をとってくれば⁽⁴⁴⁾、我々は町や社交界で影響力のある紳士や貴婦人方に評判の役者からなる一団をそろえて、パーティーが成功することを保証する」といった。

結局、その収益を折半にすることで話しがまとまった。当時、このような共同活動はよくあることだった⁽⁴⁵⁾。

この記述から、当時、バクーで社会主義組織が活動資金を合法的に集める手段としてしばしば演劇会を開催していたことが分かる。これとともに、ラシウトで上演された作品がトルコ語とロシア語のものであったことや、レスールザーデの「この種の催しはここでは新鮮であり、初めてのことであった⁽⁴⁶⁾」という記述からも裏づけられるように、ラシウトでコンサートや舞台を上演して資金集めを行うという手法はザカフカースからやって来たブレーションが指示したと考えて間違いないだろう。

ザカフカースからの支援は単に政策の指示だけではなく、武器・弾薬という物資の支援にまで及んでいた。レスールザードの次の記事はこれを実によく伝えている。

アンザリー港に停泊している一隻のロシア軍艦に加えて一昨日、さらに一隻やつてきた。この軍艦には将校や憲兵まで乗船している。これらの意図は港に出入りする船を捜査し、武器を押収することである。これはギーラーンの人々をますます怒らせ、抗議を行わせる原因となっている。ロシア政府は実際に自国「籍」の船を捜査したのであればバクーやレンケランやロシア領アスタラで行うことができるからだ。⁽⁴⁷⁾

当時、船を用いれば、バクーからアンザリーまで一日とかからないことを考えれば、物資がザカフカースの各港から船で運ばれて来るのは当然であった。この記事から窺えるように、アンザリーにロシア軍艦が派遣された目的は、ザカフカースからの支援物資の流入を阻止するとともに、将校や憲兵も乗船していることから分かるように、示威的行動によって革命運動の進展を牽制するこ

とでもあった。また、ロシア領内の港での取り締まりだけでは阻止できないほどに物資の流入があったともいえる。

ところで、これらの物資の調達や運搬に要する資金はどう工面されたのであろうか。ギーラーンではなく、タブリーズの例ではあるが、一九〇八年六月の反革命クーデター後、バクーに逃亡してきたタギーザードはハイダール・ハーンとアフメット・アガイエフに伴われて、バクーの資本家たちを訪ねている。タギーザードはタブリーズへの経済支援を要請したが、支援を約束したのはムルタザ・ムフタロフだけであった。⁽⁴⁸⁾ 彼はレスールザードが特派員を務める『進歩』紙に資金提供を行っている。とすれば、レスールザードが物資支援に直接かかわった可能性は低いが、彼がバクーに記事を書き送り、イラン情勢を伝えることで、間接的にバクーの資本家たちに支援を促すことになった可能性は十分に考えられる。

次にロシアのコサック部隊や軍艦の派遣に対して取られた処置に注目しよう。先に述べたように、コサック部隊がアンザリーに上陸すると、ラシュトの臨時革命政府から各国領事館に質問状が送付された。なぜ、ロシアだけでなく、他の諸国の領事館にも送付したのだろうか。

また、軍艦の件に関しては各領事館に抗議するとともに抗議の内容を伝える書簡もヨーロッパ諸国の議会や代表的な新聞に送付されている。⁽⁵⁰⁾これらの処置は自分たちの正しさとロシアが取った行為の不当性を表明することで、国際世論に訴え、ロシアに対する国際包囲網を築く狙いがあったと考えられる。この近代的外交手法にもザカフカースからやって来たブレインの指示があったものと思われる。⁽⁵¹⁾

(4) サツタール委員会とモジャーヘディーン

ラシュトで二月七日に発生したクーデターを計画・指揮したのは、社会民主主義組織に列せられるサツタール委員会であった。また、ラシュトの革命運動を軍事的に担っていたのはモジャーヘディーンであった。⁽⁵²⁾両組織は共闘関係にあり、メンバーも重複していた。ここでは、レスールザーデの記事をもとに、ラシュトの革命運動を担ったサツタール委員会とモジャーヘディーンの活動と性格を考察するとともに、レスールザーデがこの時期イランで政治活動に従事していたかどうかについても考えたい。

ところで、モジャーヘディーンのはたらきぶりをよく

示すのは、カズヴィーンをめぐる攻防戦である。次の記事はそれをよく表している。

ヒジュラ暦の三月一四日、ポール・アンブーフ要塞を守るアミードッ・ソルターン指揮下の少数のモジャーヘド部隊に対して、四百人あまりの敵が攻撃をしかけてきた。激しい戦闘で敵の一人が死亡すると、彼らは戦闘から手を引き、退散していった。さらに、朝までに先の要塞のため、人員と弾薬が補充され、これを見た敵方はこれ以上前進することをあきらめた。この成功は周辺に影響を与えている。翌日、五百人以上の志願兵がさまざまな銃で武装し、ポール・アンブーフにやって来て、モジャーヘドたちを支援するために、要塞の防御に参加している。

(中略) イェンギでは政府軍は鉄床の奴隷状態になっているが、彼らの兵器は木製のマウゼリー銃三丁が全てである。彼らを欺いて八人のモジャーヘドは敵が思いもよらない方法で敵軍の中央に攻撃をしかけた。爆弾を一、二個爆破させることで、全軍を混乱させ規律を乱した。このやり方で、四〇人を殺害し、

多数のものを負傷させ、残った者は逃亡せざるをえなかつた。⁽⁵³⁾

この記述から見出せるのは次の四点である。①モジャーヘド部隊は政府軍と善戦していたが、数の上では圧倒的に劣勢であった。②モジャーヘド部隊の善戦ぶりに感化された周辺住民が志願兵として協力したことで数の上での劣勢が改善された。③政府軍は兵士の数こそ多かったが、慢性的な兵器不足に陥っていたのに対して、モジャーヘド部隊はたえず、ラシュトから武器・弾薬が補充され、物資には事欠かなかった。④数の上で劣勢であったモジャーヘド部隊がとった作戦は爆弾を使う攪乱作戦であった。

このなかでとくに注目したいのは②と③である。周辺住民が志願兵として協力したのは、モジャーヘド部隊の善戦ぶりに感化されたこともあるが、革命政府が重税に苦しむ住民を救ってくれるという期待も一因していた。また、武器・弾薬に関しては、(3)で述べたように、その多くはザカフカースから送られてきたものと思われる。とすれば、周辺住民の協力やザカフカースからの物資の支援がなかったならば、数の上で圧倒的に劣勢であった

モジャーヘド部隊がカズヴィーンとテヘランを征服するのは難しかったに違いない。

興味深いことに、民衆の間のモジャーヘドの人気にあやかつて、モジャーヘドを名乗る偽モジャーヘドまで登場している。

一人のカフカースからやって来た犯罪者はどういうわけか、自分をモジャーヘドのように見せることに成功し、ノーベル会社の役員と事務所の数名の従業員を暗殺しようと企てた。しかし、この悪巧みは察知され、すぐに軍事委員会によって逮捕されて取調べをうけた。また、共犯者の何人かも逮捕されたらしい。世論を操作しようと、これ以外にも多くの疑わしい情報が流れている。たとえば、どうやらロシアの銀行の頭取に無記名の手紙が送りつけられ、金銭が要求されたという情報が最近広まっている。しかしながら、確かな根拠があるわけではない。(中略) かつてトラブル・メーカーとしてこの新聞の親愛なる読者の皆さんもよくご存知の商工会議所会頭サメドハーンもまた人びとを困惑させている。この男はカフカースからラシュトに逃亡してきた犯罪者

や無頼漢を集めて、住居を与え、様々な悪事を企んでいる。話によると、ノーベル会社の役員の間で逮捕されたアブドル・ホセインという人物もこれに関係し、彼が提供した住居に入居していた。(中略)二月八日、つまり、ラシユトが征服された日の翌日、銃を一、二丁持ったこの男が現れ、大きな騒ぎを起こした。彼に従うごろつきたちを扇動し、暴動を起こしたのだ。⁽⁵⁴⁾

バクーの無頼漢に関する次の記述を併せ考えると、上述の記事に出てくるサメドハーンとその配下にあったものの正体はつきりしてくる。

この時代、警察の無力ぶりをみた諸企業は多額の報酬を支払い、バクーでゴチュと呼ばれるごろつきたちに身の安全を託していた。総じて、有名な石油企業ノーベル会社はこの目的でH・M・某イエフという人物と深い関係にあった。⁽⁵⁵⁾

先に述べたように、ザカフカースとギーラーン地方は地理的に近いということもあって、モノと人の移動が密

接不可分なたちでおこなわれていた。しかし、両地域の関係は決してプラスの面だけではなく、マイナスの面も有していた。ザカフカースで犯罪をおかし、同地にいられなくなった犯罪者やごろつきがギーラーン地方に逃亡してきたことはしばしば治安悪化の要因となった。このごろつきを束ねていたのが、ザカフカースで悪事をはたらき、ラシユトに逃亡してきて当地の商工会議所の会頭におさまっていたサメドハーンという人物である。彼は民衆の間で人気のあるモジャーヘドに成りすまし、同地で影響力を広げていった。ここで考えねばならないのは、彼はごろつきたちに住居を与えるために必要な資金をどのように工面していたのかということである。また、なぜノーベル会社の役員らを暗殺しようとしたのかという⁽⁵⁶⁾ことも問題になる。

これについてはロシア領事館に依頼を受けたということがひとつの可能性として考えられる。バクーのごろつきに関する記述から分かるように、彼らは金さえもらえば、何でもする徒であり、ラシユトの革命運動を牽制しようという目的でロシアがこれらの無頼漢を用いてさまざまな工作を行わせていたと考えることは十分に可能である。

次にサツタール委員会の話に移ろう。レスールザーデは苦勞の末、サツタール委員会のメンバーの一人と会見を実現している。

州全域における統治と革命の指揮を秘密裏に支援しているサツタール委員会のメンバーの一人と強く切望し、努力した末、ようやく会うことに成功した。どんなに頑張っても、この人物からラシユトのモジヤーヘドたちの行動計画とどのようなようにしてテヘランを攻略するのについて何も聞きだすことはできなかった。(中略) 私はロシアとイギリスの政策をどうみているのか尋ねた。

イギリスとロシアはイランの秩序を大々的に乱し、政府も国民も両方とも疲弊させ、滅亡させるといのがこの両国の願望である。そのとき、この両国は条約「英露協商」にしたがって、国土と国民を所有するのである。これが両国の考えである。本能のおもむくまま、この目的を実行に移すために、二国のうちの一国「ロシア」は政府を、もう一国「イギリス」は国民を保護しているのだ。一国「ロシア」の

將校と役人は立憲派の人々を攻撃し、もう一国「イギリス」は大使館の門を開け、寛容さを示している。一国は人を殺害し、もう一国は仲裁を行っている。一国は「とらえろ」と言い、もう一国は「逃げる」と言っている。⁽⁵⁶⁾

この記事から論点になると思われるのは次の二点である。①レスールザーデはサツタール委員会と直接のパイプを有しておらず、同委員会のメンバーと会うのに非常に苦勞した。ようやく念願を果すのは、彼がラシユトに来てから一ヶ月近く経ってからのことである。また、機密にかかわる計画と行動について聞き出すことはできなかった。②レスールザーデが会った人物は、イランを滅亡させ、占領するためにイギリスとロシアは互いに役割分担をし、イギリスの寛容な態度を偽善であると考えていた。

②については、第四章でこの点について再び触れることになるだろう。ここで注目したいのは①である。ザカフカースからラシユトへロシア社会民主労働党に属するパノフが派遣されたこと、ポリシェヴィキのメンバーであるオルジョニキツゼが秘密裏にラシユトにやって来て

いたことを思い浮かべれば、ロシア社会民主労働党、とくにボリシェヴィキがサツタール委員会と直接のパイプを有していたのは明らかである。また、ボリシェヴィキのメンバーであり、イラン社会民主党の創設者の一人でもあるナリマン・ナリマノフもこのパイプにかかわっていたと考えて間違いないだろう。とすると、ヒュンメトのメンバーであるレスールザーデが同組織のメンバーでもあるナリマン・ナリマノフとは違ってサツタール委員会と直接のパイプを有していなかったことが不可解になってくる。

これについてはヒュンメトという組織がボリシェヴィキにも所属している人たちとそれ以外の人たちとの間に溝があり、必ずしも共同行動をとる一枚岩の組織ではなかったということが考えられる。この点について一九二〇年、バクーで監禁中のレスールザーデをスターリンが訪問したときの次の会話が参考になる。

—あなた方小国では自分の力だけで独立してやっていくことはできない。何はともあれ、ほかの大国と手を結ぶべきだとスターリンは言った。

—この見解では、我々はやはり大きな隣人であるあ

レスールザーデとイラン立憲革命

なた方と合意していた。しかし、ナリマノフが合意したやり方ではない、と私は言った。⁽⁵⁷⁾

これからレスールザーデとナリマノフの間でロシアとの関係をめぐって見解の相違があったことが分かる。もちろん、この記述だけでは、すでに立憲革命期に両者の間で見解の相違があったかどうかは判明しない。しかし、ヒュンメトの創設にまで遡って考えると、このあたりのことがもう少し詳らかになると思われる。レスールザーデは一九〇四年に青年アゼルバイジャン人革命家委員会とヒュンメトという組織を相次いで創設したが、回想録の中でこの経緯について次のように述べている。

バクーの工業地帯の油田で働く労働者の大半と中学校で教育を受けている若者のかなり多くがアゼルバイジャン・トルコ人であった。このため、ここで活動を行い、革命と反体制活動と並んで独自に活動も行っている地元の民族的なグループからなる組織もあった。例えば、私が創設し、そのメンバーは様々なロシア式学校やその他の高等学校で学ぶアゼルバイジャン・トルコ人の学生たちで構成された秘密ク

ラブ (gizli bir mahfel) があつた。このクラブはメンバーの民族意識を高揚させたり、ロシア式学校で教わらないトルコ語を互いに上達させたり、地元の作家の作品を読んだり、反体制的な内容の革命詩を暗誦したり、しばしば印刷された檄文を頒布したり、労働者の中に分け入って革命思想を組織的に広めるというような活動を行っていた。このクラブは印刷されたヒュンメトという名の雑誌を発行していた。組織や特に若者たちと何らかの關係を持ち、自らの影響下で組織化しようとする権を争うポリシエヴィキとメンシエヴィキの老練な活動家たちは当然、我々のクラブにも加入してきた。そして、なんとかして我々を取り込もうとしていた。⁽⁵⁸⁾

この記述から分かるように、レスールザーデが当初設立したクラブ（おそらく青年アゼルバイジャン人革命家委員会のことだと思われる）はポリシエヴィキなどの社会主義組織とは一線を画したものであつた。そして、このクラブの活動には労働者の中に分け入って革命思想を啓蒙する政治的なものも一部あつたが、基本的には文学サークルのようなものであつた。しかし、ポリシエヴィキ

キを初めとする社会主義活動家らがこのクラブに着目し、接近してきたのである。こういったことから推察すると、青年アゼルバイジャン人革命家委員会とヒュンメトとは同一組織であつた可能性が大きい。当初、文学サークル的な性格が濃かつた青年アゼルバイジャン人革命家委員会がポリシエヴィキの活動家の加入と彼らが主導権を握っていく過程で次第にヒュンメトという社会主義組織へと姿を変えていったと考えられる。つまり、設立当初からヒュンメトの内部では旧クラブからのメンバーとその他のメンバーとの間には大きな溝があつたのである。

以上からレスールザーデは、パノフらとは異なり、イランに政治活動に従事するために派遣されたわけではなく、あくまでも『進歩』紙の一特派員として派遣されたと考えるのが妥当だと思われる。このことは後年、レスールザーデがアゼルバイジャン民族主義者としての活動を開始していく際にも影響した。彼は第二次立憲期にイランを追放されたあとイスタンブルに赴き、そこでのトルコ民族主義運動の影響をうけて一九一三年、バクーに帰還した。彼がそこにおいて活動の拠点としたのは古巣のヒュンメトではなく、新しく結成された民族主義政党的なナリマノフらポリシエヴィキ

派との見解の相違をどうしても埋められなかったことがこれからうかがえるといえよう。

四 イラン・アゼルバイジャンでの観察

(一) サッタール・ハーンとの会見

ラシュトに二ヶ月ほど滞在したレスールザーデは五月、イラン・アゼルバイジャンの諸都市へ視察に出かけた。彼が再びラシュトに戻ってくるのはテヘランが征服される直前の七月のことである。タブリーズに赴いた彼はタブリーズ蜂起の英雄サッタール・ハーンと会見する。ここでは、その内容を伝えるレスールザーデの記事をもとにサッタール・ハーンの実像に迫るとともに、彼のサッタール・ハーンの評価を探ってみることにしよう。先行研究から分かるように、任侠無頼の徒ルーティーの列に処せられるサッタール・ハーンの評価はタブリーズ蜂起の最中でも、時期や人によってまちまちであった。⁽⁵⁹⁾ 会見の内容に入る前に、一九〇八年夏の最初のイラン来訪時にレスールザーデが書き送った記事の中のサッタール・ハーン像を紹介することにしよう。

ついに、まさにその日、立憲派の人々を支持する志願兵がある場所で略奪をほしいままにした。また、金曜説教師の家を略奪し、盗品を持ち帰ってくる。「いっようなことをしたため」、新たに獲得した要塞に志願兵が少数しかいないため撤退せざるをえないことをうけて、翌日、サッタール・ハーンは略奪品を集めさせ、以後戦闘中に略奪をはたらいた者は誰であれ、モジャーヘドたちが銃殺する旨を伝えた。⁽⁶⁰⁾

これにはサッタール・ハーンの規律を重んじる様子が描写されており、彼の出自の卑しさは全く感じられない。少なくとも、レスールザーデはこの時期。サッタール・ハーンに対して悪い印象を抱いていなかった。このことは、それから約八カ月後、実際に会見する段になっても変わるものでなかった。

四月の末にロシア軍がタブリーズに進軍し、町は武装解除され、タブリーズ蜂起は終わった。その約一カ月後、レスールザーデはサッタール・ハーンと会見した。場所は、彼がバストを行っていたタブリーズのオスマン朝領事館である。バストをおこなった理由は、身の安全を確保するとともに、「平和に対する我々の抗議を全世界に

知らせ、外国人たちが直ちにわが州から出て行く」ためであった。また、バストの場所としてオスマン朝領事館を選んだのは「イスラームの国家とイスラームの信条は立憲制国家の体现者である」からというところにあった。⁽⁶¹⁾つまり、サツタール・ハーンは青年トルコ人革命後、立憲制が復活したオスマン朝に親近感を抱くとともに、イスラームと立憲制は両立するものだと考えていた。会見の内容を伝える次の記述はこれを裏付けている。

サツタール・ハーンは情熱に溢れた男で、身のこなしは機敏で、話するときの態度はとても真剣である。彼の立憲制を敬愛する気持ちは信仰心にも劣らぬほどに強い。この男は立憲制の支持者となることにおいて狂信的である。行動の全てを、全身を、力の全てを国に捧げるこの男が繰り返し表明したことはナジャフのウラマーたちの神聖な教令にしたがい、彼らが発するいかなる命令でも、時を移さず遅れることなく、実行に移す用意があるということだった。

ロシアとイギリスの領事が私「サツタール・ハーン」のところに来て、「立憲制はお前の手中にある」と言った。私はというと、次のように答

えた。「あなた方は大変な誤解をしている。私は立憲制の切実な護衛者である。「立憲制の」所有者たちとはナジャフの偉大なウラマーたちである。彼らがいかなる命令を発しても、私は即時行動に移す用意がある」⁽⁶²⁾

これから分かるように、サツタール・ハーンは立憲制の熱烈な支持者であったが、それを支持する根拠は、ナジャフのウラマーが発する立憲制を支持する教令にあった。サツタール・ハーンの描写から分かるように、レスールザードの彼に対する印象はきわめて良く、会見の後で大きく変わることはなかった。これは、タブリーズ蜂起も終わりに差し迫った頃、タギーザードとサツタール・ハーンとの関係が悪化したこと、⁽⁶³⁾またイギリスのペルシア委員会の特派員としてタブリーズに派遣されたムアアのサツタール・ハーンに対する評価が後に急激に低下した⁽⁶⁴⁾こととくらべると好対照をなしている。

(2) 経済的視点からみた英露の政策

タブリーズを占領したロシア軍の動向は地域住民にどのように解釈され、またどのような影響をもたらしたの

であろうか。ロシア軍が示した条件によると、彼らがタブリーズに駐留するのは、治安が回復するまでということであった。しかし、既に治安は回復しているにもかかわらず、ロシア軍が撤退する気配は全くなかった。⁽⁶⁵⁾ イギリスがロシアのイラン・アゼルバイジャンへの介入に黙認し、事実上同意したことがロシアの態度をさらに増長させた。タブリーズ駐在のイギリス領事は、「残念なことに、わが政府はイラン・アゼルバイジャンを軽視している⁽⁶⁶⁾」⁽⁶⁶⁾と、わが政府はイギリスの本国政府に対して不満を吐露したが、レスールザーデはイギリスの不介入に対し巧妙な対イラン政策、ロシア政策を感じとり次のように言っている。

イラン・アゼルバイジャンは明らかにロシアの影響下にある。イギリス人たちはここではそれほど活動していない。彼らの持ち場はイランの南部にある。市場を手に入れようと、北でも何らかの手を講じなければならぬと考えている。このため、ロシア人たちはイラン・アゼルバイジャンに進入させ、その行動が法を犯すようしむけている。こうすることで、民衆の憎悪を増幅させ、その結果、(ロシアの)商

品に対してさえも、敵意が生じるようにはかかっていないのだ。⁽⁶⁷⁾

つまり、レスールザーデによると、イギリスがロシアのイラン・アゼルバイジャンへの介入を黙認したのは、それによって同地におけるロシアの評判を落とし、ロシア商品からイギリス商品へ買い換えるようにしむけるためであった。レスールザーデのこの見解に影響を与えたのはロシアの企業家や商人からの見聞であった。たとえば、バクターの石油産業資本家で慈善家としても知られるハジュ・ゼイネルアービーイン・タギエフの経営する企業の支店長が彼に泣きながらに自宅が放火された窮状を話している。⁽⁶⁸⁾ これからロシア臣民であれば、たとえタギエフのようにムスリムが経営する企業であってもタブリーズの人々に嫌悪されていたことがわかる。次の記述は民衆のロシア嫌いの様子をより明確に伝えている。

イラン人たちはとにかくロシア商品に見向きしていない。イギリス人たちから購入している。(中略) タブリーズの商人たちの中でモスクワの企業に負債を抱えている人を算定したら、負債は三百万マナー

ト近くになる。彼らの多くは借金を返済するつもりがなく、イギリスの企業に頼むつもりでいる。先日、数人のロシア商人と企業の代表に会ったが、ロシア商品に対するボイコットが発生するのではないかと心配していた。⁽⁶⁹⁾

この記述から分かるように、タブリーズでは一般民衆だけでなく、商人まで借金を踏み倒し、ロシア商品からイギリス商品に乗り換える事態が発生していたのである。また、レスールザーデは別の記事でロシア商人についても言及している。たとえば、ジョルファの商人たちについて、「彼らの思想は開明的であり、誰もが立憲思想の支持者である」と述べていることから明らかなように、イラン商人ばかりでなくロシア商人も立憲制の支持者であると認識していた。ここで指摘しておきたいのは、レスールザーデが、ロシア商人は、ロシア政府と異なり、「立憲制の最も理解ある支持者」であり、「(ロシア軍が)行動を起こしていることを心配している」と語っていることである。つまり、ロシア政府が行ったイラン・アゼルバイジャンへの軍事介入という行為はイラン商人ばかりでなく、ロシア商人の意思や利益にも反したもの

だったのである。彼の結語がこのことを簡潔に表現している。

もし我々の外交政策がこれ「『ロシア商品のボイコット』」に加担しているのなら、その時、イギリス人たちが沈黙する理由は明白である。⁽⁷⁰⁾

ロシアの軍事介入という行為はロシア商人を苦しめ、イギリスを利するだけであった。つまり、イラン・アゼルバイジャンの治安が回復したら撤退するというロシアの当初の約束という観点からだけでなく、経済的観点からも外交政策の変更、つまり、ロシア軍のイラン・アゼルバイジャンからの撤退が必要であるとレスールザーデは考えていたのである。

むすびにかえて

本稿では、バクー出身のアゼルバイジャン人ジャーナリスト、メフメット・エミーン・レスールザーデという人物に注目し、バクーで発行されていたアゼルバイジャン語紙に彼が執筆した論説と記事を資料に用いて、彼がイラン立憲革命をどのように観察していたのか明らかに

した。またこの資料にみえるイラン立憲革命の様相について検討を行った。改めて本稿で指摘したことを整理すると次のようになる。

第一次立憲期と小専制期の途中までバクーでペルシア語紙を購読し、イラン情勢の紹介、把握に努めていたレスールザーデは、イランにおける立憲制の敵は知事や大臣ら腐敗した官僚であると考えていた。また、国民議会選挙に対する不正を監視するために、表現・出版の自由と、ジャーナリズムが伝える情報を弁士が民衆に伝えるために集会・結社の自由が保障されなければならないと主張した。また、イランで重要な役割を果たしつつあったアンジョマンに関しては、各アンジョマンがばらばらに行動していたのではだめで、各アンジョマンを統合した大アンジョマンを創設することが必要であると考えていた。そして、この見解にはバクーで彼自身が行っていた組合活動の状況が大きく影響していることを明らかにした。

その後、ラシユトの革命運動の進展を視察するために、一九〇九年三月、レスールザーデは『進歩』紙の特派員としてイラン北部のラシユトにやって来た。ラシユトの状況を伝える彼の記事によると、ロシアはコサック部隊

レスールザーデとイラン立憲革命

や軍艦を派遣するなど、ラシユトで二月に発生したクーデターの直後からギーラーンの立憲運動を牽制する行動をとっていた。その一方で、ザカフカースの社会主義組織からは人員や物資の支援、さらには政策の指示を受けるなどザカフカースとギーラーンの連関関係がみられた。しかし、この関係は正の側面ばかりではなく、両地域が地理的に近いということもあって、ザカフカースで罪を犯した者やごろつきがギーラーンに逃亡してきたことで治安が悪化するという負の側面もみられた。また、レスールザーデが所属する社会主義系組織ヒュンメトは、サッタール委員会のメンバーと直接のパイプを有していなかった。したがって、ボリシェヴィキ派のメンバーとは協調行動がとれず、一枚岩の組織ではないことを明らかにした。ここにレスールザーデが政治活動家としてでなく、『進歩』紙の特派員としてイランにやって来た理由があつたといえよう。

註

(1) M. Ə. Rəsulzadə, *Əsərləri Birinci Cild 1903-1909*, ed. Ş. Hüseynov, Bakı, 1992.

一九〇三年から一九〇九年八月にかけてレスールザーデ

が執筆した二〇一本の論説・記事が収録されており、そのうち四割ほどがイランに関するものである。彼がイランに派遣された一九〇九年初頭からイランに関する記事が圧倒的になる。そのほとんど全てが『進歩』(Teraqi)紙に掲載されたものである。本稿で用いた新聞記事・論説は全てこれに所収されているものである。また、新聞記事・論説の典拠にあたって、あげた頁数は新聞の中の頁数ではなく、この書中の頁数であることを断っておく。

- (2) J. Afary, *The Iranian Constitutional Revolution 1905-1911*, New York, 1996, pp. 273-283.
- (3) 一九〇四年一〇月から一九〇五年にかけて六号まで発行されたが、いずれも現存しない。但し、一九一七年にナリマン・ナリマノフがヒュンメト紙を創刊したことに合わせてレスールザーデは自身が編集者を務める新聞『明瞭な言葉』(Açiq Söz)の六月五日号にかつて自分がヒュンメト誌に執筆した論文の一部を掲載している(S. Süleymanova, *Azərbaycanda İctimai-Siyasi Hərəkat*, Bakı, 1999, pp. 212-214.)。
- (4) *Ibid.*, pp. 211-212.
- (5) *Ibid.*, p. 243.
- (6) *Ibid.*, p. 211.
- (7) 例えば、劇的な勝利を収めたことで知られるバクーの一〇月ストにおいて、メンシェヴィキ、とくにシェンドリコフ兄弟は積極的にストに参加したのに対して、ボリシェヴィキは消極的だった。その後、両者の溝は決定的となり、ボリシェヴィキはシェンドリコフ兄弟を排除するべく、一九〇六年夏に党査問委員会に諮った(*Ibid.*, p. 215.)。
- (8) *Ibid.*, pp. 231-232.
- (9) *Ibid.*, p. 239.
- (10) *Ibid.*
- (11) 黒田卓「ハイダル・ハーンと近代イラン」『西南アジア研究』三六(一九九二年)、一三三頁
- (12) 八尾師誠「イラン立憲革命とロシア連邦における研究史上の問題点」『オリエント』二二一一(一九七八年)、一四九—一五〇頁。
- (13) ヒュンメト綱領では政教分離や世俗的な教育を行う学校の創設をうたった条項が削除された。また、イラン社会民主党綱領ではヒュンメト綱領に残された信教の自由や強制改宗の禁止をうたった条項が削除された。これはムスリムが少数派であるザカフカースと反対に多数派であるイランの状況を反映したものである。さらには、ヒュンメト綱領の中にある国有地と王族所有地の無補償分配を求める条項がイラン立憲革命の構成員に配慮してイラン社会民主党綱領では修正が加えられた(J. Afary, op. cit., pp. 85-86.)。
- (14) M. E. Resulzade, *Iran Türkleri - Türk Yurdu ve Sebülirreşad'daki Yazıları*, eds. Y. Akpınar, İ. M. Yıldırım and S. Çağın, İstanbul, 1993, p. 94. (以下 M. E. Resulzade, *Iran* と略記する)
- (15) "İranda Hürriyyet", *İrsad*, No. 51, 一九〇六年二月二

○日, p. 28.

- (16) *Ibid.*, p. 29.
- (17) “İranda İnkılab”, *İrşad*, No. 145, 一九〇六年六月二一日, p. 48.
- (18) *Ibid.*, p. 49.
- (19) 上の点に関連して Janet Afary の論考が興味深い (Janet Afary, *op cit.*, pp. 282-3.)。
- (20) “İran İşleri”, *İrşad*, No. 186, 一九〇六年八月八日, p. 58.
- (21) シヤールに近い保守派の人物で一九〇八年六月の反革命クーデターにも参加した。
- (22) “İran İşleri”, *İrşad*, No. 186, 一九〇六年八月八日, p. 59.
- (23) *Ibid.*, p. 60.
- (24) *Ibid.*, pp. 60-61.
- (25) S. Süleymanova, *op cit.*, p. 243.
- (26) *Ibid.*, pp. 243-244.
- (27) 最初のイラン来訪時 (一九〇八年) に、レスールザーデが『進歩』紙に書き送った記事は八月一九日と九月三日に掲載された二つだけである。この日付から判断して、彼のイラン滞在はせいぜい一ヶ月程度であったと思われる。
- (28) “İran Mektubları”, *Tərəqqi*, No. 112, 一九九九年五月二四日, pp. 328-329.
- (29) “Tehran Fehminin Tefsilatı”, No. 160, 161, 一九九九年七月一九、二〇日。

レスールザーデとイラン立憲革命

- (30) “İran Mektubları”, *Tərəqqi*, No. 57, 一九九九年三月一日, p. 294.
- (31) “İran Mektubları”, *Tərəqqi*, No. 60, 一九九九年三月二三日, p. 298.
- (32) *Ibid.*
- (33) *Ibid.*, pp. 298-299.
- (34) *Ibid.*, pp. 299-300.
- (35) *Ibid.*, p. 300.
- (36) “İran Mektubları”, *Tərəqqi*, No. 59, 一九九九年三月一日, p. 295.
- (37) *Ibid.*
- (38) Janet Afary, *op cit.*, p. 249.
- (39) M. Bayat, *Iran's First Revolution*, New York & Oxford, 1991, p. 252.
- (40) *Ibid.*
- (41) 黒田卓「イラン立憲革命におけるラシユト蜂起」『史林』六七巻一号 (一九八四年)、六八頁。
- (42) “İran Mektubları”, *Tərəqqi*, No. 57, 一九〇九年三月一日, p. 294.
- (43) “İran Mektubları”, *Tərəqqi*, No. 59, 一九〇九年三月二〇日, p. 297.
- (44) 当時、レスールザーデは政府の許可を得て教育活動を行う慈善委員会 (Necat Cemiyeti) の長であった。地下組織であったポリシェヴィキは演劇会を催すために、合法的な組織の名を借りなければならなかった (M. E. Re sulzade, *Bir Türk Milletçisinin Stalin'e İhtilal Hatıraları*,

- ed. S. Şimsir, İstanbul, 1997, p. 23.)^o
- (45) *Ibid.*, pp. 23-24.
- (46) “Iran Mektubları”, *Taragqi*, No. 59, 一九〇九年三月二〇日, p. 297.
- (47) “Iran Mektubları”, *Taragqi*, No. 76, 一九〇九年四月二二日, p. 317.
- (48) S. H. Taqizadeh, “The Background of the Constitutional Revolution, 1905-1911”, *Middle East Journal*, 14-4(1960), p. 460.
- (49) 資本家ムルタザ・ムフタロフの支援を受けてパリで教育を受けた知識人アフメット・アール(アガイエフ)によって一九〇八年に創刊された。三五〇〇部という発行部数を誇り、イランにまで購読者がいた。一九〇九年にアールがトルコへ行くと、ユゼイル・ハジユベイリとジェイフン・ハジユベイリに運営が引き継がれた。一九〇九年一月、ロシア当局の圧力によって廃刊された。
(N. Devlet, *Rusya Türklerinin Milli Mücadele Tarihi (1905-1917)*, Ankara, 1999, pp. 195-196.)
- (50) “Iran Mektubları”, *Taragqi*, No. 74, 一九〇九年四月九日, p. 311.
- (51) この点についてはダシナク党の影響が大きいと思われる。タブリーズの例ではあるが、タブリーズ蜂起後間もなくして、ダシナク党アゼルバイジャン中央委員会はサッター・ハーンと会見を行い、誤解なく状況を理解してもらうために、ヨーロッパの代表者や新聞に自分たちの主張を公式に伝えるよう助言している(Houri Berberian, *Armenians and the Iranian Constitutional Revolution of 1905-1911*, Westview Press, 2001, pp. 130-131.)^o
- (52) J. Afary, *op. cit.*, pp. 239-240; 黒田卓「イラン立憲革命におけるランフト蜂起」『史林』六七巻一号(一九八四年)、五一—五六頁。
- (53) “Iran Mektubları”, *Taragqi*, No. 75, 一九〇九年四月二六日, p. 315-316.
- (54) “Iran Mektubları”, *Taragqi*, No. 59, 一九〇九年三月二〇日, p. 296.
- (55) M. E. Resulzade, *Bir Türk Milliyetçisinin Stalin’le İhtilal Hatıraları*, ed. S. Şimsir, İstanbul, 1997, p. 22. (以下 M. E. Resulzade, Stalin と略記する)
- (56) “Iran Mektubları”, *Taragqi*, No. 77, 一九〇九年四月二三日, pp. 321-322.
- (57) M. E. Resulzade, *Stalin*, p. 38.
- (58) *Ibid.*, pp. 15-16.
- (59) 本稿の註六三と六四を参照せよ。
- (60) “Tabrizdan”, *Taragqi*, No. 43, 一九〇八年九月二日, p. 190.
- (61) “Xüsusi Telegraflar - Tabriz. Sattarxanla Mülaqat”, *Taragqi*, No. 116, 一九〇九年五月二八日, p. 334.
- (62) *Ibid.*, p. 335.
- (63) J. Afary, *op. cit.*, pp. 224-225.
- (64) M. Bayat, *op. cit.*, p. 248.
- (65) “Iran Mektubları”, *Taragqi*, No. 117, 一九〇九年五月二九日, p. 336.
- (66) *Ibid.*, pp. 336-337.

- (67) *Ibid.*, p. 337.
- (68) *Ibid.*
- (69) *Ibid.*, pp. 337-338.
- (70) ショルファはイランとロシアの国境付近にあるので、ここにはさまざまな地域から移住してきた者が商人をしており、望めばイラン臣民にもロシア臣民にもなることができるほど国籍は流動的であった。(“Iran Mektublari”, *Taraqqi*, No. 110, 一九〇九年五月二一日, p. 326.)
- (71) “Iran Mektublari”, *Taraqqi*, No. 117, 一九〇九年五月二九日, p. 337.
- (72) *Ibid.*, p. 338.